

chūnwàng

dù fǔ

春望 杜甫(しよんぼう とほ)

春望 杜甫

国破れて山河在り

城春にして草木深し

時に感じては花にも涙を濺ぎ

別れを恨んでは鳥にも心を驚かす

guópò shānhé zài

国破山河在

chéngchūnc àomù shēn

城春草木深

烽火三月に連なり

家書萬金に抵る

白頭搔かけば更に短く

渾べて簪に勝えざらんと欲す

gǎnshí huājiànlèi

感時花濺淚

hènbīēniǎojīngxīn

恨別鳥驚心

現代語訳

fēnghuǒ liánsānyuè

烽火連三月

国都長安は破壊され、ただ山と河ばかりになってしまった。

春が来て城郭の内には草木がぼうぼうと生い茂っている。

この乱れた時代を思うと花を見ても涙が出てくる。

家族と別れた悲しみに、鳥の声を聞いても心が痛む。

báitóusāogēngduǎn

白頭搔更短

戦乱は三月に入っても続き、家族からの頼りは

滅多に届かないため万金に値するほど尊く思える。

hūnyù bùshèngzǎn

渾欲不勝簪

白髪頭をかくと心労のため髪が短くなっており、

冠をとめるカンザシが結べないほどだ。